

第三話 「海ほたるの女」

鐸木能光

カーラジオからは押し殺した女性アナウンサーの声が流れている。

「今夜の東京は雪もちらつく寒さですが、房総半島ではもう花が咲き乱れています。館山でキンセンカの花畑を経営している山本さんは……」

NHKの『ラジオ深夜便』。これを聴いていると、時間の流れが妙にゆっくりになる。

さっきまでちらついていた雪は、いつしかみぞれ混じりの雨に変わっていた。日付が変わりもうすぐ一時間になるうというこの時間、前後にはほとんど車も走っていない。

ヘッドライトが照らす真っ直ぐな一本道は、このまま海の中まで続いているはずだ。

「せつかくのアクアライン初体験なのに、残念ですね。これじゃあ夜景も見えそうにないわ」

運転している助手の球湖たまこが呟いた。

「まあいいさ。午前中からやるショーなんて、せこい仕事を入れちまったんだからしょうがない」

「せこくても、このところずっとお仕事入らなかったんですから、

稼げるときには稼がないと」

「はいはい」

俺は奇術師幻治郎。数年前はテレビの寵児となり、一世を風靡したもののだが、いろいろあつて、今では細々とどさ回りをするはぐれマジシャンに落ちぶれている。

ついさつきまで、多摩のホテルでディナーショーの仕事をしていた。客の入りも芳しくなく、寂しいステージだった。明日は祝日で、鴨川のレジャーパークで、午前中からマジックショーの仕事が入っていた。休日朝の渋滞を避けて、夜中の移動となつたわけだ。

情けないことに、今夜の宿泊先は手配されていない。不況になつてからは、仕事を依頼してくるほうも条件をぎりぎりまで厳しくしてくる。今までなら断るようなせこい仕事でも、つつい受けてしまうのが哀しい。

しょうがないから、今夜は房総半島に渡つてからどこか適当なラブホテルにでも入り、明日の朝まで仮眠するつもりだった。

「師匠、絶対にダメですからね」

「何が」

「下半身の暴走行為」

「分かつてるよ。俺も今夜は疲れてるの。少しでも寝ないと明日が辛いしな」

と言いながらも、球湖とラブホテルの一室で過ごすことを想像しただけでにんまりしそうになる。

そのとき、爆音を轟かせてオートバイが横をすり抜けていった。それほど大きくはないロードレーサータイプ。恐らく排気量二五CCクラスのものだろう。

ヘッドライトに照らされたフルフェイスのヘルメットやライダースーツの背中には、蛍光塗料を使った派手な薔薇のプリントが

浮かび上がる。夜目にも目立つとはこのことだろう。

オートバイはそのまま対向車線に大きくはみ出して走り続けた。「つたく！ 何あれ。こけちゃえ！」

ステアリングを握っていた球湖がいまいましたそうに言った。

次の瞬間、その言葉通り、追い越していったオートバイは元の車線に戻りそこねて派手にスピンし、そのまま勢い余って測道に乗り上げて止まった。なんと、そこは派出所の目の前だった。

制服の警官が驚いて中から飛び出してきた。

「師匠、見ました？ 私の超能力。いい気味だわ。こつてり絞られなさい」

球湖は鼻歌を歌うようにそう言うと、幾分アクセルを踏み込んで、そのまま海の中へと車を進めた。

東京湾横断道路アクアラインは、川崎側、国道四〇九号から入るといきなりトンネルになる。夜ということもあり、特に海の下を通っているのだという実感は湧かない。

全長十五キロほどのこの道を通るのに四千円かかると聞いていたが、いつまで走っても料金所が現れない。

「どこで金取るんだ？」

俺は不思議に思いながら球湖に言った。

「さあ、千葉側で取るんじゃないですか？」

〈速度落とせ〉の電光板を何度も見ながら、球湖は時速百三十キロあまりで真っ直ぐなトンネルを飛ばす。

やがて海の上に出たかと思うと、海上パーキングエリア「海ほたる」への分岐になる。

俺は早くホテルに入りたかったが、球湖は「四千円払ったからには絶対にここはチェックしましょう」と、強引に海ほたるへと向かった。こういうときはステアリングを握っている者の勝ちだ。

休日前夜だというのに、駐車場はがらがらだった。外はみぞれ混じりの雨、風も強く、いくら休日の前でも、こんな悪天候の夜中に四千円払ってこのパーキングエリアに行こうという物好きはそうそういないということなのだろう。奇しくも俺たちはその「物好き」の仲間入りをしてしまったわけだ。

球湖は駐車場の隅のほうにひっそりと一台停めてあった白いワゴンボックスカーの隣に車を滑り込ませた。こんなに空いているのになぜわざわざ他の車にくっつけて停めるのだろうかと思っただが、黙っていた。

駐車場に掲示されている案内板を見ると、この海ほたるなる建造物は五階建てで、一階から三階までが駐車場、四階、五階が店舗棟になっているらしい。一階駐車場は上下線共通の大型車専用、二階は千葉側から入ってきた車専用、三階が川崎側から入ってきた車専用。

しかし、ここまで来ても、料金所というものはなかった。どうやら球湖が言うように、料金所は千葉側のみあるらしい。

車を降りて、エスカレーターで階上に向かう。

時刻はもう午前一時を回っていた。

「人がいないですねー。なんだか貸し切り状態だわ」

「ささつと見て、早く引き上げような」

妙に元気な球湖に、俺は釘を差した。

球湖はステージ衣装を着たままだった。派手なラメのチャイナドレス。腰から下は大胆なスリットが入っていて、黒い網タイツの脚が見え隠れしている。一応上からコートを羽織っているが、これもステージ用の真っ黒なマントで、冷静に見ると、とんでもない格好だ。

どうせ移動するだけだからと、私服に着替えずに車に乗り込んだのだ。まっすぐホテルに直行するのだからと、俺も気に留めな

かった。こんな寄り道をするのが分かっていたらちやんと着替えさせるのだったと後悔した。

それでもまだ、人が少ないから助かった。こんな格好の彼女と一緒に昼間の東京を歩くのはご免被りたい。

時刻が時刻だけに、飲食店もゲームセンターも閉まっていた。開いているのは、四階のコンビニエンスストアと最上階のデッキフロアにあるセルフサービスの軽食コーナーだけ。人影もほとんどない。

いくら真夜中とはいえ、これが話題の海ほたるかと思うと、なんだか拍子抜けだ。東名高速のサービスエリアなどなら、平日の真夜中でももっと人がたくさんいる。

展望デッキ出ると、俺たちの他には黒いライダースーツに身を包んだ若い男が一人だけだった。寒そうにポケットに両手を突っ込んだまま、暗い海を眺めている。

夜景を楽しむむという雰囲気ではない。みぞれ混じりの雨はまだやんでいなくて、海上にはガスが立ちこめ、ほとんど何も見えな
い。

「ささ、こんなもんだって分かっただろ。早く引き上げよう」
俺は球湖を促して駐車場に戻ろうとした。

そのとき、「ごめーん」という声がして、エスカレーターの上から女が一人、小走りに駆けてきた。

女もやはり革のライダーズーツを着ていた。たった一人、デッキにたたずんでいた男の連れらしい。

「待った？ ごめん。マップに捕まってさ。切符切られちゃったんだ」

女は男のもとに駆け寄ると、早口でそう言った。

「あら……あれ、さっきの……」

それを見ていた球湖が俺に耳打ちした。

背中に派手な薔薇の花柄をあしらったライダースーツには見覚えがあった。アクアラインに入る前、俺たちの車を無理に追い越し、その先で勝手にスピンして舗道に乗り上げたあげく、ちょうどその交番に詰めていた警官に呼び止められたドジなやつだ。フルフェイスのヘルメットを被っていたので分からなかったが、薔薇のプリントを施したライダースーツの「中身」はやはり女だったのか……。彼女もあれからアクアラインに入ったわけだ。二人はここで待ち合わせをしていたらしい。こんな荒天の夜中に、オートバイ同士で海ほたるの逢瀬……。相当変わった趣向ではある。

俺は興味をそそられ、二人の様子を観察し始めた。

男は髪を短く刈り上げ、中肉中背。女のほうはショートカットで男より少しだけ背が低い。似合いのカップルと言えなくもない。すると、女がこちらを振り向き、走り寄ってきた。

「すみません。シャッターを押してもらえませんか？」

そう言うと、女は手に持ったコンパクトカメラを差し出した。美人というほどではないが、意志の強そうな目が印象的だった。こんな夜中に写真など撮っても、背景は何も映らない。馬鹿馬鹿しい頼みだとは思ったが、断るのも面倒だったので「いいですよ」と答えた。

女は連れの男を展望レストランの前に導き、自分もその隣に立った。海を背景にしても何も映らないだろうから、まあ、それなりに正しい位置取りではある。

男は女に一方的に指図され、むっとした顔をしていた。

渡されたカメラをよく見ると、小さいながら高性能な機種で、しかもすでに夜景モードのロングシャッターに設定されている。咄嗟にこうした特殊撮影モードにセットするところを見ると、この女、メカにはかなり強いようだ。

「うまく映らないと思いますよ」と断った上で、俺は両肘をしつかり脇につけて、なるべくぶれないような姿勢でシャツターを切った。

「すみません。駄目押しでもう一枚」

女はそう言っつて、結局、合計三枚の写真を俺に撮らせた。

カメラを返そうとすると、女は後ろで見ていた球湖の妙な格好に気づいたらしく、不振そうな目を向けた。

次にもう一度俺の顔を見ると、女は表情をぱつと明るくさせて言った。

「あの？ 失礼ですが、もしかして幻治郎さんじゃないですか？」

一瞬返答に困った。嘘をつくのは嫌だが、そうだと認めるのもやっかいなことになりそうだった。

しかし、女は俺が答える前にこう叫んでいた。

「わあ、凄い。私、大ファンだったんです。すみません、ぜひ一緒に写真撮らせてもらえませんか」

ファン「だった」という過去形が皮肉だった。テレビに出なくなった俺は、引退したも同然ということなのだろう。

「ねえ、あなた。これ」

女は連れの男にカメラを渡すと、さっさと俺の隣に立った。男は無然とした表情のままシャツターを切った。

「じゃあ、これで」

俺はそう言っつと、呆れた顔で一部始終を見守っていた球湖の背中を押すようにしてエスカレーターのように向かった。

球湖が四階のコンビニで白熊の小さなぬいぐるみを見つけて衝動買いたした。俺は、マジックの小道具にいいかもしれないなどと、その白熊がレジで精算されるのを見ていた。

店の中にも客の姿は二、三人しかいない。今、この海ほたるの施設内では、確実に客よりも従業員の数のほうが多いだろう。

腕時計を見ると午前一時半。こんな調子ではホテルを見つけない。頃には夜が明けてしまう。明日は午前九時にはショーの会場に入り準備しなければならぬから、どうやらホテルで球湖と一緒に過ごすひとときを楽しむ余裕などありそうもない。

三階の駐車場に降り、隅の一角に目を向けると、白いワンボックスカーの隣で、俺たちの車、くたびれた国産ワゴン車が肩身が狭そうにして停まっているのが目に入る。主人の帰りを静かに待つ老犬のようだ。

その車に乗り込もうと近づいたところで、球湖が「まあ」と声を上げた。

「なんだよ」

「派手なオートバイだなと思つて……」

球湖の視線を追うと、ショッキングピンクに塗装されたオートバイがあった。タンクとカウルには薔薇の花のステッカーが貼つてある。さっきの女が乗ってきたバイクだ。

「しかし、一台しかないな。男のほうは千葉側から来たつてことか」

「そうだったんだ……」

球湖は呟くように言うと、妙に名残惜しそうな素振りですれすれに乗り込んだ。

出口へ向かうとき、駐車場をゆっくり一周したが、やはりオートバイは一台だけだった。

アクアラインは、千葉側、川崎側どちらからでも海ほたるでUターンができるというのが一つの売りになっている。実際、海ほたる観光目的でここまで来た後、元来た方向にUターンしていく車は相当多いらしい。

駐車場出口は、千葉方向、川崎方向別にゲートが別れていて、川崎にUターンするゲートにだけ料金所が設けられていた。

俺はようやく、なぜ川崎側に料金所がなくても海ほたるでの方角Uターンが可能なのかが分かった。

つまり、アクアラインの料金所は木更津側の上下線と、海ほたるの三階駐車場川崎Uターン口の三か所にあるわけだ。

川崎から入り、千葉へ抜ける場合は、海ほたるでは金を払わず、海を渡った木更津の料金所で支払う。川崎から入り、海ほたるで川崎にUターンする場合は、この駐車場の出口で金を払う。

千葉から入った場合は、行き先に関係なく、入るときに木更津で金を取られる。千葉に戻る場合は、海ほたる駐車場の千葉へ戻る方向のゲートに「Uターン証明書発行機」なるものが置いてあり、ここで受け取った証明書を木更津料金所で渡す。

暗い海にせり出す橋を見ながら、俺はふと独り言のように呟いていた。

「男は千葉から、女は川崎から……か」

ステアリングを握る球湖が、俺のその言葉を受けて言った。

「彼女があんなに急いでいたのは、恋人に一刻も早く会いたかったからなんです。海を挟んで離ればなれになっている恋人を結ぶ恋の架け橋アクアライン……なーんちゃって。彼女、交通違反切符切られたって言ってましたよね。高いアクアラインの通行料の他にとんだ出費もしちゃって、可哀想」

無謀運転で追い越されたときには腹を立てていたくせに、今はすっかりあの女ライダーに同情している。

「しかし、恋人同士にしちゃ、あの男、終始ニコリともしていなかったぜ」

「そう言えばそうですね。待たされて怒っていたのかな」

海ほたるを出ると、すぐに木更津料金所だった。

川崎側から入り、千葉側へ抜ける俺たちは、ここでようやく料

金を払うことになる。

俺たちを乗せたワゴン車は、暗い海を渡って房総半島へと入っていった。

適当なラブホテルが見つからず、結局ベッドに入ったときには夜が明けようとしていた。

情けないことに、俺は疲れのせいか、湯上がりに飲んだウイスキーのせいか、横になるなり眠り込んでしまった。

▽✚▽

千葉県警の刑事が二人、「幻治郎事務所」を訪ねてきたのは、海ほたる経由で房総半島に渡り、鴨川のレジヤールランドでの仕事を終えた数日後だった。

事務所と言っても、都下の住宅街の外れにある築三十五年の貸家だ。敷地は十五坪。建物の中には奇術の小道具などが雑然と置かれている。その片隅に、俺は寝泊まりしている。

ちなみに、球湖は隣町にある彼女の実家から通ってくる。仕事で旅をするときは一緒だが、普段は別々に暮らしている。

小道具などを興味深そうに見渡した後、刑事は型どおりの挨拶をすませ、すぐに本題に入った。

「二月十日の夜……いや、正確には十一日の未明ですが、アクアラインの海ほたるで、ライダースーツを着た女性と一緒に写真を撮られたという記憶はありますか？」

そう訊いてきたのは年長の刑事のほうだった。名刺の肩書きは捜査一課課長補佐となっている。

「ええ、覚えていますよ」

俺が認めると、刑事は写真を数枚出してテーブルの上に並べた。「これですね？」

それは確かに、俺があるとき海ほたるのデッキでライダースー

ツの男女を撮影した写真と、迷惑そうな顔の俺が女と並んで写っている写真だった。

「そうです。これが何か？」

「この男女をご存じですか？」

「いいえ、まったく。あの夜、たまたまあの場所に居合わせて、写真を撮ってくれと頼まれただけです。こっちの三枚は私が撮ったものです。その後、女性が私が幻治郎であることに気づいて、一緒に記念撮影させてほしいと言ってきたわけです」

「そうですか……」

「何があつたんですか？」

刑事はその質問には答えず、一方的にあの夜の俺たちの全行動を訊いてきた。

若いほうの刑事は傍らでメモを取るだけで、喋っているのはもっぱら年長の刑事のほうだった。頭が薄く、目も落ちくぼんでいて老人のように見えるが、実際にはまだ五十にもなっていないかもしれない。

俺はこの刑事が繰り出す無遠慮な質問の一つ一つに、苛立ちを覚えながらも素直に答えていった。

刑事は「ほう」「なるほど」などと短く反応しながら、次々に質問を浴びせかけてきた。何時にどこで仕事を終え、何時にアクアラインに入り、海ほたるを出た後はどうしたかというようなことまで、逐一訊いてくる。

そばにいた球湖の全身に好色そうな視線を送りながら、俺たちがあの夜、ラブホテルに泊まったことまで確認してきたのにはさすがに腹が立った。

「私たちは旅芸人ですからね。スケジュールの都合でそういうことは珍しくない。だけど、それがなんだって言うんです？ 私は何か事件の容疑者なわけですか？ こちらは正直に答えているん

だ。ここまで人のプライバシーに立ち入ったことを訊いてくるからには、そちらもちゃんと説明する義務はあるでしょう？」

俺の語気に押されたのか、この無礼な刑事はようやく事情を説明し始めた。

「この写真に写っている男性が、この直後に木更津の海岸から海に転落して死んだんですよ。ご存じでしたか？」

「いいえ、まったく」

「そう……。まあ、新聞にも小さく載っただけだからね。その事故の件で調べているんですよ。」

亡くなったのは原岡衛みづのへさんと言って、川崎でバイクショップを経営する二十六歳の男性です。オートバイごと埠頭から海に転落しての水死でした。

警察に男性と思われる声で、『今、目の前でオートバイが海に落ちるところを目撃した』という通報がありましたね、それが十一日の午前二時四十五分。すぐに署員を急行させました。荒天でしかも深夜ということもあり、遺体の引き揚げにはかなり手間取りました。引き上げられた遺体にあった腕時計は、ちょうど午前二時四十三分を指して止まっていましたし、通報の時刻とも合わせて考えれば、まあ、その時刻に落ちて死んだことは間違いないでしょう。

ライダースーツのベルトに通してあったチェーン状のアクセサリがオートバイのハンドルに絡まっていますね、皮肉にもバイクが重石代わりになったんだねえ。遺体からはかなりの量のアルコールが検出されていて、まあ、酩酊運転での事故というのが一つの見方としてあるわけですが……」

「一つの見方……と言うと、他にも見解が可能だというわけですね？ 他殺ではないかと。この写真に一緒に写っている女性の犯行という線を調べているわけですね？」

俺は単刀直入に訊いた。

「そんなことは言っていないでしょ。事故にしては、多少、不自然なところもあるんで、一応は裏を取らなければ……と、調べているわけですよ。形式的なものです」

そこまで言うと、刑事は球湖が運んできたコーヒーを、ズルズルと音を立てて飲んだ。

「形式的なもの？ それにしちやずいぶん根ほり葉ほり俺たちのことを訊いてきたじゃないですか。あれが『形式』ですか？ 違うでしょう？」

「あくまでも職務上の形式です」

刑事は苦しそうにそう答えると、後は俺の質問を無視し、若いほうの刑事を顎で促して、さっさと引き上げていった。

「なーあれ。いけ好かないオヤジ！」

球湖が、刑事たちが出ていった後のドアに、吐き捨てるように言い放った。

数日後、今度は保険調査員と名乗る男が電話してきて、話を聞かせてくれと事務所にやってきた。

やってきたのは、俺と同世代、四十台半ばくらいの男だった。体重は百キロはあろうかというがっしりした体格で、スーツがきつそうだった。

しかし、不摂生による肥満ではなく、スポーツで鍛え上げた筋肉の塊であることは容易に分かった。

「……ええ、よく言われます。アマチュア相撲ではかなりいいところまで行ったんですよ」

男はそう言いながら、〈百合根聡美〉と書かれた名刺を差し出した。

「ゆりねさとみ？」

「ええ。風貌に似合わない、ギャグみたいな名前でしょう？ 親も罪なことをしてくれたもんです」

先日の刑事の来訪に腹を立てていた後だっただけに、かなり身構えてこの保険調査員を迎え入れたのだが、会ってみるとなかなか人間味のあるやつだ。

とは言っても、百合根が訊いてきたのは刑事たちと似たようなことだった。さすがに、当夜の俺たちの行動のすべてを根ほり葉ほり訊くようなことはなかったが。

「大変お邪魔しました。どうもありがとうございます」

一通り事実確認をすると、百合根は残念そうな顔をして立ち上がりかけた。

「ちよつと待ってください」

俺は百合根を引き留め、もう一度ソファの上に座らせた。

「契約者のプライバシーの問題とか、いろいろあるんでしょうが、ここだけの話として、もう少しこの事件の背景をざっくばらんに話してもらえませんか？」

「……と言いますと？」

百合根は、警戒半分、期待半分といった複雑な表情になった。

「ズバリ、保険金目当ての殺人ではないかということでしょうか？ 調査員が出てくるといことはそうですね？」

「いえ、そんな……私は何も、奥さんが怪しいなどは……」

「奥さん？ あの二人は夫婦だったんですか？」

「え……ええ」

思わず口を滑らせた百合根に、俺はすかさず畳みかけた。

「なるほど。読めてきましたよ。彼女が夫に多額の生命保険をかけていた……そうですね。こないだやってきた刑事は、核心を教えてくれなかった。さてと、あなたがこれ以上の情報を私にくれなければ、事件はここでおしまいです。あの女の計算通りにね」

「ちよつと待つてください。私はなにもそこまで……」

「さあ、腹を決めましょう、百合根さん。このままじゃあ、保険金、下りちゃいますよ」

追い打ちをかけるように俺がそう言うと、百合根はようやくその気になったようだった。

「分かりました。では、ここから先は、絶対に内密にお願いしますよ」

「もちろん。マジシャンは秘密を漏らさない。鉄則です。この世にマジシャンほど口の堅い人間はいません」

俺のその言葉に、百合根はにやっと笑うと、今までとは打って変わった調子で疑惑の核心を語り始めた。

「まず、原岡夫妻は別居中でした。バイク仲間が結婚し、川崎市内に「ヘローズライダー」という小さなバイクショップを開いたまではよかつたんですが、店がようやくよく軌道に乗ったところでご主人の衛さんが他に女を作りましてね。相手は木更津市内に住むまだ十八歳の学生です。その女を追って、自分も木更津にアパートを借り、彼女が通ってくる半同棲のような暮らしを始めていたんです。

店のほうは放つたらかして、奥さんの柚美ゆずみさんが一人で切り盛りしていたんですが、もう限界だったようです。ご主人は店名義の口座からどんどん金を下ろして、女と遊びほうけていたようですし、奥さんはたまらなかつたでしょうね。海ほたるで落ち合ったのも、別れ話をまとめるために奥さんが呼び出したようです。

ところが、その直後に夫は変死。しかも、つい最近、妻が夫に多額の生命保険をかけていた。しかも、その保険内容は、病死は扱わず、事故死に対してだけ保険金が下りるタイプのものです。保険の申し込みは奥さんが一人でしていて、多分ご主人は自分に多額の生命保険がかけられたことは知らなかつたんじゃないかと

思います。別居の後の保険契約でしたからね」

「状況的には奥さんが真つクロなわけなんだあ。なあんだ、恋の架け橋アクアラインってわけじゃなかったのね」

球湖が横から口を挟んだ。

「はあ？」

球湖の言葉に、百合根は調子つぱずれの声を上げたが、球湖はすぐに「いえいえ、どうぞその先を」と促した。

百合根はソファに座り直すと続けた。

「これだけ状況的に怪しいのに、警察が事件として扱うのを断念したのは、柚美さんには完璧なアリバイがあつたからなんです。

あの夜、ご主人も柚美さんもオートバイで海ほたるに向かいました。ご主人は木更津側から、奥さんの柚美さんはバイクシヨツプがある川崎側からアクアラインに入り、海ほたるで落ち合ったわけです。

木更津料金所の係員の証言では、あの夜、午前〇時から未明の午前三時までの間にアクアラインに入った二輪車は一台しかなく、出ていったのも一台だけでした。どちらもご主人のバイクです。みぞれ混じりの雨の深夜ですからね。単車でアクアラインに乗り入れるような物好きは他にはいなかったということですよ。

ご存じのように、高速道路では二輪車の二人乗りは禁じられています。料金所の係員の証言で、通過した二輪車はオフロードタイプのもので、行きも戻りも一人乗りだったことも分かっています。

午前一時十五分に二人が海ほたるにいたことは、写真にも撮られていし、事実こうしてお二人が証言なさっています。

その後、二人は喧嘩を始め、怒ったご主人は一人で木更津に戻りました。木更津料金所を午前一時五十分に通過しています。Uターン証明券を受け取った料金所係員の証言があり、記録も残つ

ています。

午前二時二十分に、奥さんが海ほたるからご主人の部屋に電話し、留守番電話に伝言を入れています。へ心の整理がつかなくて、まだ海ほたるにいます。さつきは喧嘩口調になってすぐに別れてしまったけれど、もう一度冷静に話をしたいから、これを聞いたら、私の携帯に電話をください。まだ暫くは海ほたるにいますから、という内容でした。

その後、二時四十三分に『今まで連絡を待って海ほたるにいましたが、もう遅いので今夜はもう帰ります。明日また電話します』という内容のメッセージが入っていました。

その直後、海ほたるの三階駐車場から川崎にUターンするゲートにある料金所で、ピンク色のオートバイに乗った女性が料金を支払って出ていったと、料金所の係員が証言しています。なにしろピンクのオートバイに薔薇のステッカーを貼ったヘルメット、背中に大きな薔薇をあしらったライダースーツですから、目立ちますよね。係員もはっきり覚えていました。証言だけでなく、記録も残っていました。通過時刻は午前二時四十八分。留守番電話に吹き込んだ五分後ですから、内容と一致しています。このときの領収書も彼女が持っていましたから、この時刻に彼女が海ほたるを出て川崎側に戻っていたことは間違いありません。

ご主人の死亡推定時刻はその直前の午前二時四十三分、つまり柚美さんが夫の留守番電話に『もう帰ります』と伝言を入れたまさにその時刻です。二分後の二時四十五分に、落ちるのを目撃したという人物が警察に通報していますし、ご主人がしていた腕時計も四十三分を指したまま止まっていました。

名前を名乗らない人物から通報を受けた警察は現場に急行し、二時五十分に到着して事故を確認しています。でも、夜だったこともあって、遺体の引き揚げは手間取り、免許証から身元確認が

できたのは明け方でした。

すぐに柚美夫人のところ、つまりバイクショップに電話で連絡が入り、彼女はオートバイで木更津に駆けつけています。

つまり、あの夜の奥さんの行動はほとんど分刻みで明らかになっていくんです。川崎側からオートバイで入り、海ほたるで夫と会って写真を撮り、その後、夫は千葉に戻り事故死、奥さんは海ほたるに残ったまま夫の部屋の留守電にメッセージを入れて待っていたけれど、結局連絡が取れないまま、二時四十八分に海ほたるを出て川崎に戻った……と」

「なんか不自然だなあ。私は千葉側には渡っていません、だから千葉で海に落ちて死んだ夫には関知していません……と言いたいために作り上げたアリバイみたいだ」

「ええ。でも完璧なアリバイですよ。彼女が千葉に渡って夫を殺し、川崎に戻っていったとしたら、アクアラインを出るときと入るときの両方とも木更津料金所を通らなければなりません。あの派手な二輪車だからかなり目立ちますし、オートバイは普通車とは通行料金が違うのではつきり記録も残ります。それが、二輪車の通行記録も残っていないければ、料金所係員も見えていないという以上、彼女のアリバイを崩しようがない。

万が一、料金所に記録を残さずに千葉に渡れたとしても、夫が海に落ちて死んだと見られる時間に彼女が海ほたるにいたことは、駐車場出口料金所の記録で明白です。いくらなんでも木更津の海岸から三分で海ほたるに戻ることはできませんからね」

「共犯の可能性はどうですか？」
俺はいちばん気になっていた点を訊いた。

「はい。警察もその点を重点的に調べたようです。ところが、いくら彼女の周囲を調べても、あの夜、行動を共にした誰かがいたとは思えないんです」

「そうかあ、こないだのいけ好かない刑事、私たちが共犯者じゃないかと疑ってたわけなのね」

じつと聞いていた球湖が急に大きな声を上げた。

「共犯者がいれば、共犯者が乗ってきた車に乗り換えたりすることもできるだろうしな。でも、逆に、ここまで自分は海ほたるにいたんだというアリバイを固めているということは単独犯だからこそだろう。共犯者がいるなら、いちいちこんな面倒なことはいない。むしろ足跡を消そうとするだろうからね」

俺の指摘に、百合根も大きく頷いた。

「そうですね。でも、警察はついに立件を断念しました。事故として処理するそうです」

「へなちよこだなあ。じゃあ、私が彼女のアリバイを崩しましようかね」

俺のその言葉に、百合根は驚いて訊き返した。

「そんなこと、できますか？」

「トリックに関してはこちらはプロですからね」

そう言うと、俺はさつき百合根からもらった名刺を持ち、目の前に掲げた。

百合根は何事かという顔で〈百合根聡美〉という女のような名前が記された自分の名刺を見つめている。

「せめて、聡美じゃなくて、聡さとしだったらよかったと思ったことはありませんか？」

俺はポケットから銀色に光り輝くクロームメッキのボールペンを取り出すと、名刺の〈聡美〉の部分を目指しながら言った。

「ええ。何度も思いましたよ。もう諦めましたけれどね」

百合根は困ったような微笑を浮かべて答えた。俺が何をするつもりなのかはかりかねているのだろう。

「じゃあ、いつそ聡にしちゃったらどうですか」

俺はそう言うと、百合根の名刺に印刷された〈聡美〉の〈美〉の部分にボールペンの先を突き立てた。

「エイッ！」

俺の掛け声と共に、ボールペンは名刺を貫通した。

〈聡美〉の〈美〉の部分は、ボールペンに突き通されて穴が開き、消えてしまった。

「これで聡になりましたね」

そう言って百合根の顔を見ると、さっきよりはいつそう困惑の度合いを深めた苦笑が浮かんでいた。

いくら気に入っていないくとも、自分の名前に穴を開けられている気持ちができるはずはない。

「でもね、このお名前にも、きっとそれなりにご両親の深い思いが込められているんでしょ？」

俺はボールペンが貫通したままの名刺を百合根の目の前に掲げながら言った。

「ええ……。祖父がつけたそうです。戦争のときの苦い体験から、もし日本がもう一度戦争をするようなことになったとき、女の子のような名前なら、役所が間違えて、孫に赤紙をよこさないんじゃないかと」

「いい話じゃないですか。今のガキどもは、赤紙なんて言ったら分らないでしょうけれどね。戦争を体験したおじいさんの願いは切実だったんでしょ。いいお名前だ。やっぱり聡美じゃなきゃだめなんですよ」

そう言うと、俺は百合根の目の前で、名刺に突き刺したボールペンを一気に引き抜いた。

ビュツという摩擦音と共に、元通りのきれいな名刺が俺の手の中に入った。

百合根は、何が起きたのか、にわかには理解できないまま呆然

と自分の名刺を見つめていた。

俺は名刺を彼に渡した。

穴をふさいだ痕跡はない。元通り、きれいなままだ。

「え？ まさか……」

百合根は自分のスーツのポケットから名刺入れを取り出して中身を確かめ始めた。

「別の名刺にすり替えたんじゃないですよ。さっき私がいただいた名刺です。ボールペンを突き通して穴を開けてから、引き抜いて穴を元通りにふさいだんです」

「あはは、そんな馬鹿な！」

「まあ、絶対にありえないと思えるようなことも、こんなふうに現実に起きるってことですよ。海ほたるのトリックも、まあ似たようなものですね。」

もう少し調べてから、後日、種明かしをしましょう。彼女が夫を殺したのはほぼ間違いないでしょうね。保険金は下りません。ご安心を」

「本当ですか？」

百合根は半信半疑ながらも、来たときよりは明るい顔で帰っていった。

▽◆▽

数日後、俺と球湖、百合根は木更津東署の一室にいた。

原岡柚美のアルバイトリックを崩すという俺の申し出のために、警察がセッティングしてくれたのだ。

しかし、刑事たちはあまり機嫌がよくなかった。それはそうだろう。プロがまだ解明できないトリックを、犯罪捜査の素人が解説するというのだから。

机の上には、あの夜の原岡夫妻の行動が記された大きな紙が置

かれていた。

こう書いてある。

● 一日午前〇時五〇分・原岡柚美、ア
クアラインの入口手前、浮島橋交番前で
派手に車線違反をし、交番に詰めていた
青木巡査に青切符を切られる。

青木巡査は念のため、その後バイクで暫く追尾。柚美が午前一
時にそのままオートバイでアクアラインに入るのを確認。

■ 午前〇時五〇分。原岡衛、木更津金田
第一料金所を通りアクアラインに入る。
料金所に記録あり。その際の領収書も衛
の所持品より発見。

● 午前一時三〇分頃、海ほたるの五階デ
ツキで、柚美は先に来ていた衛と合流。
居合わせたアベツクの一人に衛と並んだ
記念撮影を依頼。写真を撮影したのは奇
術師幻治郎こと本名佐藤治（四四歳）。

■ 午前一時五〇分、アクアライン木更津
方面出口料金所を原岡衛運転のオートバ
イが通過。海ほたるで発行しているウタ
ーン証明書を提出。その前後、料金所を

通過したオートバイは他にないことは、料金所の記録と係員の証言で確認済み。

●午前二時二〇分。柚美が衛のアパートに海ほたるから電話を入れる。留守番電話になっており、メッセージを残す。

「今、別れたばかりだけれど、まだ気持ちの整理がつかなくて海ほたるにいます。もう一度会いたいので携帯に電話をほし……云々」。その後、二時四十分になり、「今まで海ほたるで待っていたが、連絡がないのでもう帰る」と二回目の伝言を入れる。

■午前二時四五分。「たった今、若い男と思われる声で百十番通報。木更津海浜公園そばの埠頭で、オートバイが海に転落するのを見た」とだけ告げて切れる。署員急行。最初のパトカーは二時五〇分に現場到着。その後、レスキュー隊も到着するが、荒天と夜間のため、救出活動は難航。

●午前二時四八分。柚美が海ほたるを出る。三階駐車場から川崎方向へ戻るゲート料金所の記録と係員の目撃証言あり。柚美が所持していた領収書の記載時刻とも一致。

■午前五時十分、ダイバーが水死体を引き上げる。その後、オートバイも引き上げ。

免許証により身元確認が取れたので、午前五時半、夫人の原岡柚美に電話で連絡。連絡を受けた彼女はオートバイでアクアラインを通り、現場に駆けつけた。

検死解剖の結果、死因は水死。死亡推定時刻は同日午前二時から二時四五分の間。腕時計の針は午前二時四三分で止まっており、通報の記録とも合わせて、転落の時刻は二時四三分と推定。

この事故の通報者は不明のまま。他の目撃者も今のところ現れていない。

「この一連の記録通りなら柚美はシロです。これを崩すわけですね？」

刑事が俺に念を押した。

「ええ」

俺は自信たつぷりに答えた。

そこに柚美が入ってきた。

不敵にも、俺と球湖を見つけると笑いかけてきた。

「幻治郎さんにまたお会いできるなんて……」

「私はなんだか、あなたとはもう一度会えるような気がしてしましたよ、奥さん」

奥さんという呼びかけは気に入ってもらえなかったようで、柚美は真顔になった。

「この度はとんだご迷惑をおかけしたようで、本当に申しわけありませんでした。海ほたるであるな気まぐれなお願いをしたばかりに……」

「気まぐれじゃないでしょう。アリバイ作りの一環だ。まあ、相手がたまたまマジシャンの私だったというのは誤算だったわけだが」

「そんな……。どういふことですか？ 私が夫を殺したとでもおっしゃるんですか？ 私はあのまま川崎に戻りました。それはもう、警察のかたが実証してくださっています」

「確かに川崎には戻りましたよね。でもその前に、夫の後をつけて千葉側にも渡ったでしょう？」

「とんでもない！ 何を根拠にそんなことを。千葉の料金所の記録を見ていただければ分かるはずですよ」

「確かにオートバイの行き来は一台だった。でも、車の行き来はすべてチェックしたわけじゃない。そうですね？」

俺は刑事たちのほうを向いて言った。

「まあ……そうだが、彼女はオートバイでアクアラインに入っているんだ。それは直前の派出所の警官の証言で分かっている。実際、あんたたちだって証人になったじゃないか」

事務所を訪ねてきたあの頭の薄い刑事が言った。

「そうよ。それに第一、彼が死んだ時間の前後に私が海ほたるにいたのは証明済みなのよ。オートバイだろうが車だろうが関係ないわ」

柚美が叫んだ。

「いや、そうでもないんだな、これが。確かに君は一時頃オートバイでアクアラインに入り、そのまますぐ海ほたるへ向かった。そして午前二時四十八分に乗ってきたオートバイで海ほたるを出ている。それは間違いない。でも、俺たちが海ほたるを後にしてから二時四十八分までの間、ずっと海ほたるにいたという証明は何もない。留守番電話に吹き込んだメッセージにしても、海ほたるからかけたという証拠はない。さらには、ご主人が二時四十三分に海に転落したという証拠もない。警察への通報は君がしたかもしれないし、腕時計の細工など簡単にできる。死亡推定時刻は、あくまでも検死報告にあるように、午前二時から二時四十五分の間。そしてその時間帯、君を海ほたるで目撃した人は誰もいない」

「何を言ってるの！　どうかしてるんだわ。ねえ、刑事さん、この人に言っておいてください。あれはただの事故だったんだと」

「まあまあ。続きを聞こうじゃないですか、奥さん」

逆上する柚美を、刑事の一人がなだめた。

「君は実に綿密な計画を練り上げた。じゃあ、最初から順を追って説明しましょうか」

俺は机の上に広げられた羅紗紙を裏返し、そこに凶を描きながらトリックの解明を始めた。

「まず、君は事前に店のワンボックスカーの荷室にオートバイを乗せて川崎側から海ほたるに向かった。多分、目立つあのピンクのやつじゃなくて、もっと地味なやつだったんだろう。服装も地味だったはずだ。行動を起こす前の準備段階で人から注目されたらまずいからね。」

駐車でオートバイを降ろし、それに乗って川崎に戻った。そして今度は目立つピンクのオートバイに乗り換え、派手な格好で

海ほたるへ向かった。ここからはアリバイ作りをしなければいけない肝心な場面だから、一回目とは逆に、目立つ行動を重ね、念入りに証拠を残したんだ。

まず、交番の前でわざと派手な車線違反をして違反切符を切られた。そうしておけば、自分がオートバイに乗ってその時刻、その場所にいた明白な証拠になるからね。アクアラインの川崎側には料金所がなくてノーチェックだから、こうやってはつきりした証拠を残しておく必要があったわけさ。

海ほたるに着いてからも、その時刻に海ほたるにいたことを証明するため、俺に写真を撮らせた。まあ、これが運の尽きだったわけだけれどね。

夫を海ほたるに呼びだした口実は、離婚の件で相談したいとかなんとしてことだったんだろうが、会った後は彼を怒らせるようなことを言い、話し合いがすぐに決裂するようにした。彼は乗ってきたオートバイで帰っていく。君はあらかじめ駐車場に停めておいたワンボックスカーに乗り換え、彼の後を追った。

そして人気のない海岸に誘い出して彼をまず気絶させた。薬品を嗅がせたかなにかしてね。そしてウイスキーを胃の中に流し込み、腕時計を二時四十三分に合わせてから壊して止め、アクセサリのチェーンがオートバイに絡まったように見せかけてオートバイを重石代わりにして海に突き落とす。犯行の時間は二時から二時二十分にかけてくらいかな。犯行の直後、二時二十分には、『今、海ほたるにいる』という伝言を入れてアリバイを一つ増やした。

そして、すぐに車でアクアラインに入り、海ほたるへ戻る。二時四十分に駐車場から彼の部屋の留守番電話に『今まで海ほたるで待ったけれど、連絡がないので帰る』というメッセージを入れ、次に二時四十五分に、木更津署にオートバイが海に転落したのを

見たと通報した。

男の声だったそうだけれど、声色を変えたか、携帯用のボイスチェンジャーみたいなものを使ったんじゃないのかな。

そして車を二階駐車場に置いたまま、三階駐車場に停めてあったオートバイに乗り換えて川崎に戻ったんだ。それが二時四十八分。

でも、これで終わりじゃない。これだけだとワンボックスカーが海ほたるの二階駐車場に残ったままだからね。

アクアラインを抜けたら、今度は湾岸道路、京葉道路、館山自動車道と乗り継いで東京湾岸をぐるっと回って木更津に向かう。これはかなり時間がかかるけれど、あの時間帯なら一時間もあれば行けただろう。周到な君のことだから、今度はライダースーツの上に地味なブルゾンか何かを着込んで、目立たないようにしていたんじゃないかな。そして木更津側からもう一度アクアラインに入り、海ほたるの二階駐車場に停めてあったワンボックスカーの荷室に乗ってきたバイクを積み、ワンボックスカーで川崎側へ抜ける。家には五時前には着けたはずだ。

もちろんこのときに木更津側の料金所は通るわけだけど、その時間には警察はもう事故現場で遺体とオートバイの引き上げ作業にかかっている、犯行の可能性とは全然関係のない時間帯になっている。

警察から君に連絡が入ったのは午前五時半。君はご苦労なことにもたまたまアクアラインに入り、現場に急行した……というわけ「さ」

柚美の顔は見る見る青ざめていった。

「でたらめだわ。悪いけど幻治郎さん、みんなあなたの妄想よ。

第一、証拠が何もないじゃないの」

「証拠はあるよ」

俺は思わせぶりに言った。

「薔薇の花さ」

「え？」

柚美は声にならない声を上げた。

「君のバイクやヘルメットには、薔薇の花のステッカーがいくつも貼りつけてあった。蛍光塗料を使った結構派手なものだけど、どうも市販品じゃなくて特製らしかった。あれはおたくのバイクショップへローズライダー〱特製のステッカーじゃないのかな。」

そしてあのとき、駐車場で俺たちの車の隣に停めてあったワンボックスカーには、小さかったが〱ROSE RIDER〱というロゴが入っていた。あっちもこっちも薔薇か……と思ってふと気を留めたのさ。

そうしたら、その白いワンボックスカーのバンパーに、同じ薔薇の花形にシールを剥がした跡が残っているのを見つけてしまったんだな。

ワンボックスカーは川崎ナンバーで、番号は1107。〱いいおんな〱……無意識のうちに語呂合わせしてしまうのが俺の癖だね。もっと違うナンバーだったら覚えてもいなかったのに、これも不運だったね。

ステッカーは犯行の前に剥がしたんだろう？ ピンクのバイクはアリバイ工作のために目立たなければいけないけれど、ワンボックスカーのほうは極力目立ってはいけないわけだからな。

ステッカーを剥がした跡は、後ろのバンパーの右端だ。調べれば分かるはずだよ。それが証拠さ」

「そんなの証拠にならないわ」

柚美が叫んだ。

「そうかな？ あのとき俺が君の車を海ほたるの駐車場で見ていなければ、そんなことは知りようがない。立派な証拠じゃないか

な。マジシャンは観察力と記憶力が人一倍いい。ほとんど習性でね。どんな些細なことも見逃さないのさ。

刑事さん、彼女のバイクショップで使っているワンボックスカーを調べてください」

「分かった。今すぐ手配する」

若い刑事が一人部屋を出ていった。

柚美の唇が小刻みに震え始めた。

例の頭の薄い刑事がすかさず詰め寄った。

「そうなのかね？」

柚美は答えない。

「車のナンバーやステッカーを剥がした跡は調べればすぐに分かる。どうなんだね？ この人が言う通りなのか？」

柚美は黙っていた。しかし、もはや言い逃れる術が思いつかないようだった。

やがて、両手を強く握りしめ、俺のほうをきつと向き直ると、こう言った。

「一つだけ違っているわね」

「ほう。どこかな？」

「車のナンバーは1107じゃなくて4107よ。へいおんなじゃなくてへいおんな。マジシャンの記憶力っていうのも、完璧じゃあないわね。でもまあ、八十点ってところかしら」

柚美はせめてもの強がりでそう言った。

「今のを自供とみなしていいね？」

刑事が柚美に静かに宣告した。

事件解決から暫くして、事務所に百合根が菓子折を持って訪ねてきた。

丁寧に事件解決の礼を述べた後、ちよつと言出しにくそうに

しながら、ポケットから一万円札を取り出した。

「こんなことをしていいものかどうか悩んだんですが……」

「なんですか？ お礼なんていいんですよ」

「あ、いやいや、そうじゃなくて、こないだ見せていただいたマジックです。私の名刺にボールペンで穴を開け、その後で引き抜いても元通りになっていたという……」

「ああ……あれですか。種明かしはしませんよ。マジシャンは口が堅いと言ったでしょう？」

「はい。それは分かっております。でも、私、あれから眠れないほど悩み続けましてですね。一応私なりに結論を出してみたんですが、ご覧になっていただけませんか？」

そう言うと、百合根は、一万円札に続いて、ポケットから真っ二つに切った鉛筆を取り出した。

鉛筆の切り口には小さな丸い磁石が接着剤のようなもので固定されている。

「自分でこしらえたもので、こんなに不細工になってしまったんですが」

百合根はそう言いながら、一万円札を二本の鉛筆の磁石面で挟みこんだ。札の表と裏に丸い磁石、そこから鉛筆の両端が伸びている。

一万円札の端を持ったまま、百合根は片方の鉛筆を横方向に力一杯引いた。

紙幣を挟んで反対側にあった鉛筆も、磁石の力で引きつけられたまま移動する。実際には磁石でくっついた半分ずつの鉛筆が紙幣を挟んだまま横方向に動くのだが、素早くやると引き抜いたように見える。

そのパフォーマンスをし終えた後、百合根はにやっと笑って俺を見た。

そばで見えていた球湖が拍手してやられた。

だが、マジシャンたるもの、そう簡単に降参するわけにはいかない。

「そんなんで札を鉛筆が貫通したように見えますか？ まだまだ修行が足りませんね」

俺はそう答えたただけだった。

マジシャンは口が堅いのである。

(了)

(94年頃執筆。未発表)